HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スコラ的神の存在証明における闇
Author(s)	大出, 哲
Citation	基督教学, 13, 50-57
Issue Date	1978-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46354
Type	journal article
File Information	13_50-57.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

スコラ的神の存在証明における闇

大出哲

アキノのトマスによって展開された神の存在証明を聞く人の何人が、神の存在を認めるであろうか。「三角形の内角の和は二直角である」という幾何学的定理を受け入れうる人たちの何人が、この伝統的神の存在証明を受け入れうるであろうか。この伝統的神の存在証明が幾何学的定理の証明と同程度に説得力をもつことはない、ということは動かすことのできない事実なのである。この説得力の少なさはどこから来るのか。本稿はこれを探る。

このために「五つの道」[1]の第一を、すなわち、第一の動者の証明を取り上げたい。第一の道が「いっそう分かりやすい道」[2]と言われているからである。

「この世界において或るものどもが動いていることは確実であり、感覚によって確知される。しかるに、動いているものはすべて、他のものによって動かされている。……それゆえもし、動いているもの（A）がそれによって動かされるそれ（B）が動いているならば、このもの（B）もまた他のもの（C）によって動かされているはずであり、さらにこのもの（C）もまた他のもの（D）によって動かされているはずである。しかし、この場合、無限への進行はありえない。……それゆえ、どんなものによっても動かされていない或る「第一の動者」に必然的に到達することになる。そしてこのものを、人はすべて神として理解しているのである」[3]

この証明において第一に注目すべきは、これがアリストテレスの「第一の不動の動者」の証明の借用である、とい

うことである。この事実を明らかにかつ容易に把握しうるために、アリストテレスの「第一の不動の動者」の証明を、かれの世界像の素描とともに見ることにしよう。アリストテレスによれば、(1)宇宙の中心は地球であり、[4](2)七つの惑星は外に向かって、月、太陽、金星、水星、火星、木星、土星という順序で並び、[5]その外側に諸恒星がある。[6](3)地球を中心とする五十六個の透明な同心天球が存し、そのうちの五個が月の運行に、九個が太陽の運行に、九個が金星の運行に、九個が水星の運行に、九個が火星の運行に、七個が木星の運行に、七個が土星の運行に属している、[7]各グループの一つの天球に各惑星が固着しており、最も外側の天球にはすべての恒星が固着している。(4)恒星の天球は、これら内側の惑星の諸天球を動かしながら永遠な円運動を続けている。運動しているものは必ず或る何ものかによって動かされねばならぬから、恒星の天球、すなわち、第一の天球を動かす或るものが存在しなければならない。「動かされかつ動かすものは中間位にあるものであるから、動かされないで動かすところの或るものがあり、これは永遠的なものであり、実体であり、現実感である」[8]これが「第一の不動の動者」である(5)「第一の不動の動者」は、その神的な善美のゆえに、「あたかも欲求されるもの（欲求の対象）や思惟的なもの（思惟の対象）が欲求者や思惟者を動かすような仕方で」[9]、ないしは、愛の対象が愛する者を動かすような仕方で、[10]他から動かされないで、自らも動かないで、まず恒星の天球を動かし、恒星の天球はさらにその下の天球を、それはさらにその下の天球を動かす。こうして、第一の不動の動者から発する運動は最後の天球に伝達される。(6)月の天球の内側は、すなわち月下の世界は、四元素（火、空気、水、土）から構成されており、[11]そこでは生成消滅が現象する。しかし、月の天球の外側は、四元素とは異なるアイテールから成り、生成消滅から放免されている。[12]

トマスの神の存在証明とアリストテレスの「不動の動者」の証明とを比較するとき、後者をトマスが借用したことは明白であろう。このことは思想の歴史において重要な意味をもつ。トマスの体系へと組み込まれたアリストテレスの世界像が教会の権威のもとにヨーロッパの思想界を近世に至るまで支配するからである。

例えばダンテ（1265-1321）はトマスから強く影響され、アリストテレスとプトレマイオスの世界像に若干の変更を加えて詩的遍歴の舞台とする。ダンテは、かれらと同様に、不動な地球を中心に据える。[13] しかし、天球の数を天使の九段級に合わせるために、恒星天の外側に原動天を設定する。この原動天は、不動の動者ではなく、動かされながら他の天球を動かすものである。[14] 原動天を動かすものは創造主たる神である。[15]

アリストテレス的世界像が近世に至るまで強大な権威をもっていたという事実は、一六三三年六月二十二日のガリレオ裁判の判決に見られる。「太陽が世界の中心でその場所から動かないとする主張は、哲学的には馬鹿気ており偽りである。また形式的には、明白に聖書に違背しているから、異端である」。[16] 「地球が世界の中心ではなく、不動でもなく動き、あまつさえ日周運動をするとの主張も、同様に哲学的に馬鹿気ており、偽りであり、神学的には、少なくとも信仰上誤りだと考えられる」。[17]

第二に注目すべきは、「第一の道」を支えている原理が、占星術の原理でもあるということである。「この世界において或るものどもが動いていることは確実であり……」とトマスが言うとき、「動いているもの」が月下の世界における事物であるならば、月下の世界における事物の運動から始めて神へと達するためには、まずそれを月上の世界へと関係づけなければならない。このことが可能であるためには、「天体の運動は月下の世界における諸現象すべての原因である」という原理によらなければならない。この原理は、トマスにおいてはこう言表されている。「或るものどもは、不動であればあるほどそれだけいっそう、より可動なものどもの原因である。しかるに、諸天体は他の諸物体に比してより不動である。なぜなら、諸天体は場所的な運動によってしか運動しないからである。それゆえ、この下界の諸物体の、さまざまで多様な形態をなす運動は、天体の運動を原因としてこれへと帰着せしめられる」。[18] またこの原理は、アリストテレスにおいてはこう言表されている。「生成があるならば、必然的に他の運動（遊星の運動）もまた、それが一つであれ多数であれ、存在しなければならない。なぜなら、天界全体の運動に応じて、必ず物体の

諸元素のあいだにも同じような関係がなければならないから」[19]。アリストテレスにもトマスにも見出されるこの原理は、占星学を保証する原理でもある。したがって、占星術の書物においてトマスは、占星術を保証する中世の傑物と称賛されている[20]。この両名によって権威づけられた占星術の原理は中世に深く滲透し、われわれの時代にまでも影響を及ぼすことになる。

トマスの「第一の道」が当時の人たちによって容易に受け入れられたとすれば、それは、かれらを支配していたアリストテレス的宇宙像とかれらに滲透していた占星術的思想の故にであろう。なぜなら、占星術を保証するあの原理によって、月下の世界の諸物体のさまざまな運動はまず原因である天体の運動にまで還元され、次にアリストテレス的同心天球の体系によって「第一の不動の動者（神）」へと容易に還元されうるからである。アリストテレス的な閉じられた宇宙に住んでいたところの・トマスと同時代の人たちは、地上の事物の運動に影響を及ぼす惑星の複雑な運動と恒星天の規則正しい日周運動とが、恒星天の外側に住む「第一の不動の動者」によって動かされているのを肌で感じたにちがいない。しかし、恒星天の有限なカラが Giordano Bruno (1547-1600) によって破棄され、月下の世界と月上の世界との境界が Galileo Galilei (1564-1642) によって取り除かれて以来、人々は「第一の不動の動者」の作用を肌で把えることができなくなったのである。アリストテレス的宇宙の崩壊と共に「第一の道」の説得力も崩壊したのである。

しかしながら、今なお「第一の道」の正当性を主張する人たちがいることは事実である。したがって、現代の科学的状況のなかで、この「第一の道」をもう一度歩んでみる必要がある。

一八二七年、Brown は、水に浸った花粉を顕微鏡で覗いているとき、花粉が上下、前後、左右に絶え間なく不規則に運動し続けているのを発見した（ブラウン運動）。一般に流体中に浮かんだ微粒子に見られるこの運動は、流体分子の密度および速度分布のゆらぎによって生じるものである。密度のゆらぎとは、きわめて小さい体積のうちにある

流体分子どもの密度が、その絶え間ない・はげしい・でたらめな運動のゆえに、場所と時間により、平均密度の前後に変動することである。流体密度がむらになると、流体分子の衝撃効果が或る方向に優勢になる。これが速度分布のゆらぎである。

では、ブラウン運動の原因である流体分子の絶え間ない・はげしい・でたらめな運動の原因は何であろう。温度が上がると流体分子の運動が活発となり、下がると緩慢になることは一般に知られている。このことから、分子運動の原因は熱エネルギーである、と考えることができる。では熱エネルギーはどこから来るのか。その一部は水力、潮汐力、原子力から来るが、大部分は太陽の熱から来る。では太陽の熱は何から来るのか。それは原子核反応から来る。では原子核反応は何に起因するのか。……このようにわれわれは先へ先へと進むことができる。最後の答えは一体何であろうか。動いているということは存在を前提とするがゆえに、[21] 最後の答えは、(1)永遠から永遠へと存在しながら自分自身から運動する物質的なものであるか、あるいは、(2)無から創造しながら動かす精神的なものであるかである。第二選言肢の選択は、キリスト教的啓示を前提とする。万物の創造主である唯一の神が存在するという真理には、哲学の歴史が示すように、キリスト教的啓示なしに何びとも到達しえなかったからである。

ティマイオスにおける世界形成の説明によれば、デミウルゴスはあらゆる原因のうちで最も優れたものであった。[22] しかし、プラトンはそれから神性の多数性と質料の先在とを排除しえなかった。すなわち、第一に、デミウルゴスは世界霊魂をつくる。[23] 第二に、宇宙の質料、すなわち、火、空気、水および土を。[24] 第三に、恒星と惑星とを火から造る。[25] かれらは神々とよばれている。[26] 第四に、創造された神々に向かって可死的な動物を造るように命じる。[27] 創造された神々は、それを世界霊魂と火、空気、水、土から造る。[28] この四つの元素は一体何から造られるのだろうか。それは生成の乳母から造られる。[29] では世界霊魂は何から造られるのか。それは、不可分割的で永遠に変化しない現実性と可分割的で変化する物質的なものとから混成される。[30] ではこの物質的なものは何から造られるのか。それは恐らく生成の乳

母からであろう。

アリストテレスは「第一の不動の動者」に到達した。それは恒星の天球を動かす神である。しかし、かれは、惑星の各天球に不動の動者を置く。[31] このようにかれは、神性の多数性を排除しえなかった。そのうえ、かれはキリスト教的創造の概念と全く無関係であった。なぜなら、アリストテレスによれば、運動は永遠であり、[32] 運動が永遠であるならば、時間もまた永遠であるからである。というのは、時間が存しないならば、運動における「より先とより後」は存しえないからである。[33]

古代の偉大な哲学者二人にとって、キリスト教的創造の概念は思いもよらぬことであった。かれらによって到達されえなかった真理を、聖書は明快に告げる。「イスラエルよ聞け、主なるわれらの神は唯一の主である」[34]「はじめに神は天と地を創造した」[35]。これらの啓示を介して、第二選言肢に関わる創造の概念が哲学の舞台に登場する。啓示を理性に不可欠な補助ないしは指導者として受け入れる人たちの群が次第に際立ってくる。かれらは啓示の導きによって、何の疑いもなくあの第二選言肢を選びとる。このような立場をとる哲学者だけが「第一の道」の正当性を主張するのである。かれらは、自らの哲学説を根拠づけるために、パウロの次の言葉を引き合いに出す。[36]「神の見られないものどもは、世界の創造このかた、造られたものどもを介して知られて、明らかに認められる」[37]。しかし、もしこのパウロの言葉が、神の存在をその御業から証明する可能性の根拠とされるならば、信仰をもたない人たちの次の問いにはどう答えられるべきであろう。「なるほど、この世界が〝造られたものども〟であるならば、それから神の存在は証明されえよう。だが、われわれ信仰なきものどもにとっては、この世界が〝造られたものども〟であるかどうかが問題なのである。あなたがた petitio principii を犯しているのではないか」。ともあれ、パウロのあの言葉に依存する人たちの眼には——かれらの信仰の眼には——この世界は造られたものとしか映らないのであり、かれらにとって「第一の道」は依然として正当性を保持しているのである。

要するに、「無から創造しながら動かす精神的なもの」という第二選言肢を選ぶか選ばないかは、信仰をもつかもたないか、という点にかかっている。哲学は信仰を補助者ないしは指導者とするべきではないとする人たちにとっては、哲学する ratio が光であるならば、信仰はいわば闇なのである。したがって、かれらはこう言うであろう。「神の存在証明の本質は、信仰という闇に支えられているのだ」と。神の存在証明――就中第一の道――の説得力の少なさは、まさにこのことに関わっているのである。

註

(1) Summa theol. I, q. 2, art. 3, cor.
(2) Ibid.
(3) Ibid.
(4) Arist. De mundo 391 b 12-13.
(5) Arist. De mundo 392 a 16-29.
(6) Ibid.
(7) Arist. Met. 1074 a 6-14.
(8) Arist. Met. 1072 a 24-26. 出隆『アリストテレス哲学入門』岩波書店、一九七二年版、一七三頁。
(9) Arist. Met. 1072 a 26. 出隆、同上書、同頁。
(10) Arist. Met. 1072 b 3.
(11) Arist. De caelo 270 b 20-22.
(12) Arist. De caelo 270 a 20-22.
(13) Dante, Div. Com. Par. XXVII, 106-107.
(14) Ibid. XXVIII, 70-71. Dante, Div. Com. Purg. XXVIII, 103-105.
(15) Dante, Div. Com. Par. XXX, 100-108.
(16) サンティリャーナ『ガリレオ裁判』武谷三男監修、一瀬幸雄訳、岩波書店、一九七三年版、五八四頁。

(17) サンティリャーナ『ガリレオ裁判』武谷三男監修、一瀬幸雄訳、岩波書店、一九七三年版、五八四頁。

(18) Summa theol. I. q. 115, art. 3, cor.

(19) Arist. De caelo 286 b 2-4. アリストテレス全集4『天体論』村治能就訳、岩波書店、一九六八年版、六五頁。

(20) 'St. Thomas Aquinas was one of the outstanding medieval figures to endorse astrology.' Derek and Julia Parker, The Compleat Astrologer, Mitchell Beazley, London, 1971, p. 25.

(21) Liber de Causis et Sancti Thomae de Aquino super Librum de Causis Expositio, Institutum Sancti Thomae de Aquino, Kyōto, Japonia, 1967, Propositio 18, p. 102.

(22) Plato, Tim. 29 A.

(23) Ibid. 34 B-35 A.

(24) Ibid. 31 B-32 C.

(25) Ibid. 40 A.

(26) Ibid. 40 BC.

(27) Ibid. 41 A-D.

(28) Ibid. 42 E-43 A.

(29) Ibid. 52 DE.

(30) Ibid. 35 A.

(31) Arist. Met. 1073 a 32-34.

(32) Arist. Phys. 252 a 3-4.

(33) Arist. Met. 1071 b 6-9.

(34) 『申命記』六の四。

(35) 『創世記』一の一。

(36) Nul n'ignore que toute la spéculation des Pères de l'Église et des penseurs du moyen âge sur la possibilité de prouver Dieu à partir de ses oeuvres se rattache directement á la fameuse parole de saint Paul dans l'Épître aux Romains (I, 20): Invisibilia Dei per ea quae facta sunt, intellecta conspiciuntur. É. Gilson, L'Esprit de la Philosophie Médiévale, J. Vrin, Paris, 1948, Chap. IV, p. 73-74.

(37) 『ローマ人への手紙』一の一一〇。